

「産経抄」産経新聞社、2010年6月13日朝刊を読む

1. 昭和 52 年に刊行された小林秀雄の大作『本居宣長』（新潮社）は全編、歴史的仮名遣いで書かれている。難解な漢字を正字体で用いルビはほとんど振らない。本居宣長の著作をはじめ「源氏物語」や「古事記」などの古典からも数多く引用している
2. 戦後教育で育った者は専門家以外、漢和辞典や古語辞典を傍らに置かないと、まず読み通せない。実は後の文庫版では現代仮名、新字体に改め、ルビもふんだんに振ってある。それなら最初からそうすればいいではないか。大評論家への^{そし}誹りの声も聞こえてきそう
3. しかし『本居宣長』は、古典や日本精神の大切さを訴える小林の遺言的作品とされる。それだけに文中から「これくらい読めないと、日本の古典は理解できない」という警告も読み取れる。古典から急速に遠ざかる戦後文化に対し危機感を抱いていたに違いない
4. 元凶は昭和 21 年、当用漢字表で漢字の使用を大幅に制限したことである。使うことの少ない漢字を覚えるのはムダだということだったのだろう。しかし、難しい漢字が目に触れなくなることで古典が読めなくなる、という視点がすっぽりと抜け落ちていたのだ
5. その当用漢字を引き継いだ常用漢字表が 29 年ぶりに見直されるという。新たに 196 文字を追加し、制限はかなり緩くなった。だが^{ゆううつ}憂鬱の「鬱」や^{こい}語彙の「彙」など字画の多いものが使用可能になる一方で「鷹」は除外された。依然として不満の声は多いようだ
6. そもそもなぜ国が漢字を規制する必要があるのかよく分からない。だがそれ以上に選定基準が「パソコンで変換が容易」「使われる頻度が少ない」と相変わらず実用本位なのが気になる。文化の将来を考えると、「憂鬱」さは消えそうにもない。

[コメント]

文字はその国の文化そのもの。漢字は日本文化そのもの。その内容を学ぶ機会を制限したり、内容を変更することは文化に対する挑戦。パソコン変換を理由に変えることは大問題。

- 2010年6月13日 林明夫記 -